

小野市所在

下大部岡ノ山遺跡

— 県営小野久下山住宅（第2期）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成17年3月

兵庫県教育委員会

小野市所在

下大部岡ノ山遺跡

— 県営小野久下山住宅（第2期）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成17年3月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は、兵庫県小野市田岡町859-1に所在する、下大部岡ノ山遺跡の本発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、県営小野久下山住宅（第2期）建設事業に伴い、県土整備部まちづくり局住宅整備課の委託により、兵庫県教育委員会が、平成13（2001）年5月10日から、同6月7日かけて実施した。また整理業務は、同課の委託により、平成16年4月1日から平成17年3月31日にかけて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
3. 本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の森内秀造、久保弘幸が担当した。
4. 本発掘調査において、富士測量株式会社に委託し空中写真撮影を実施した。また、遺物写真の撮影は、（株）タニグチ・フォトに委託して実施した。
5. 本書の執筆は、森内・久保がおこない、文責は本文目次に示した。また編集は、久保がおこなった。
6. 本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用い、また、方位は国土地理院V系で示している。
7. 本書で使用した地図は、兵庫県遺跡地図（兵庫県教育委員会 平成12年 1/35,000）に基づき、これに加筆したものである。
8. 本発掘調査および本書に関する図面、写真および出土遺物は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会魚住分館において保管している。

本文目次

第1章 遺跡をとりまく環境	
第1節 地理的環境（久保）	1
第2節 歴史的環境（森内）	3
第2章 調査の概要	（久保）
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の概要	6
第3節 整理事業の概要	8
第3章 遺構と遺物	
第1節 遺構	（久保） 9
第2節 遺物	（森内・久保） 15
第4章 総括	
	（森内・久保） 20

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第2図 地形分類図	2
第3図 周辺の遺跡	4	第4図 調査区的位置	7
第5図 遺構分布図	9	第6図 調査区地層断面図	9
第7図 掘立柱建物跡1	10	第8図 掘立柱建物跡2	11
第9図 掘立柱建物跡3	11	第10図 掘立柱建物跡4	12
第11図 掘立柱建物跡5	12	第12図 掘立柱建物跡6	13
第13図 土坑（1）	13	第14図 土坑（2）	14
第15図 溝（S35）	15	第16図 溝（S1・2）	16
第17図 出土遺物（1）土器	18	第18図 出土遺物（2）土器・土製品	19
第19図 出土遺物（3）石器	20		

表目次

第1表 調査一覧	6
----------	---

写真図版

- | | | | |
|---------|-------------------------|------|------------------|
| カラー写真図版 | 調査地遠景（南から） | 図版 6 | 土坑 S 23 断面（西から） |
| | 調査地遠景（北から） | | 土坑 S 55 断面（西から） |
| 写真図版 1 | 航空写真（南から） | | 土坑 S 83 断面（南から） |
| | 航空写真（西から） | | 土坑 S 103 断面（東から） |
| 写真図版 2 | 調査区全景（南から） | | 土坑 S 87 断面（西から） |
| | 調査区全景（西から） | | 土坑 S 56 断面（南から） |
| 写真図版 3 | 掘立柱建物跡 1（南から） | 図版 7 | 出土遺物（1）土器 |
| | 掘立柱建物跡 2（南から） | 図版 8 | 出土遺物（2）土器・土製品 |
| 写真図版 4 | 掘立柱建物跡 3（西から） | 図版 9 | 出土遺物（3）石器 |
| | 調査地から加古川対岸を望む | | |
| 写真図版 5 | 溝 S 1 断面（1）（北から） | | |
| | 溝 S 1 断面（2）（北から） | | |
| | 溝 S 35 断面（南から） | | |
| | 溝 S 2 断面（北から） | | |
| | 土坑 S 23・130・131 断面（南から） | | |
| | 土坑 S 25 断面（北から） | | |

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

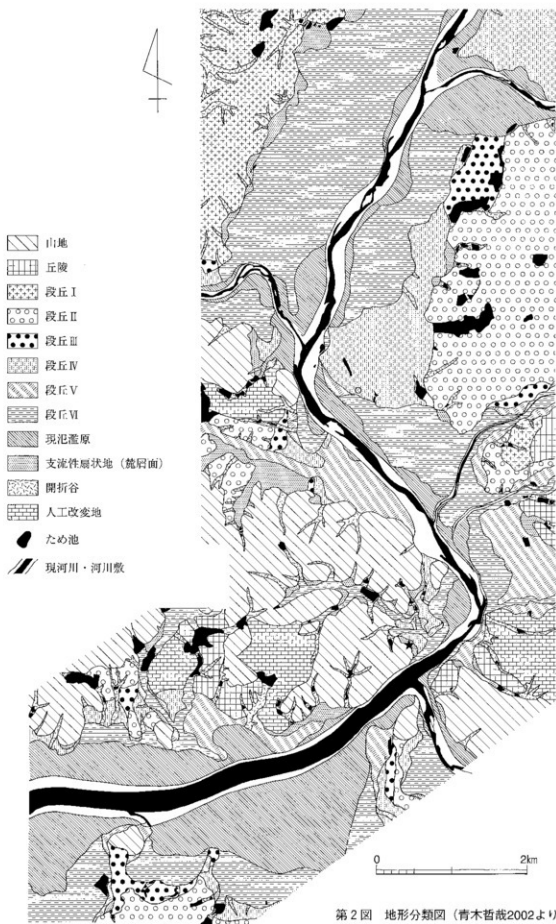
下大部岡ノ山遺跡は、小野市田園町に所在する。遺跡は、長さ86.5kmを測る、兵庫県最長の河川である加古川の左岸に発達した段丘面上に立地している（第1図）。

加古川は、一般的には河口から美義川との合流点付近までの旧賀古郡域を下流域、杉原川の合流点付近までの旧賀毛郡域を中流域、篠山川の合流点付近までの旧多可郡域を上流域と便宜的に分けられることが多いが、小野市域は、おおむねこの中流域に相当し、右岸の青野ヶ原台地、左岸の小野台地に挟まれた地域に段丘面と低地が形成されている。この地域の段丘は、青木哲也氏によって検討がおこなわれており、I～VIの段丘面に分類されている¹⁾（第2図）。下大部岡ノ山遺跡が立地するのは、このうちの段丘IVと考えられ、調査地付近の標高は、約33.5mを測る。

調査地点西の加古川対岸では、万願寺川が、加古川に合流する。また、狭い氾濫原を挟んで山地が接し、遺跡が立地する段丘面と相対している。この地点から上流側には、完新世段丘と考えられている段丘面VIが発達し、その大部分は水田として開墾されている。こうしたことから、調査地付近を境界として加古川上流側と下流側は大きく景観を異にしており、上流側は、独立した地理的領域を形成している。



第1図 遺跡の位置



第2図 地形分類図(青木哲哉2002より)

第2節 歴史的環境

調査地周辺の段丘・丘陵上では、後期旧石器時代～縄文時代の遺跡が散漫な分布を見せている。

後期旧石器時代の遺跡は、鶴池・逆池遺跡（国府型ナイフ形石器・角錐状石器）、鴨池遺跡（ナイフ形石器）など、灌漑用溜池の周辺における表面採集例が多い²。また、加古川市との境界近くにある勝手野遺跡では、1995年におこなわれた発掘調査で始良Tn火山灰層下位から、ナイフ形石器・台形石器などが出土している³。

縄文時代の遺跡としては、加古川東岸の高田小山ノ下遺跡がある。平成3年に発掘調査が行なわれ、旧河道の最下層から後期の北白川上層式および福田KⅡ式にあたる浅鉢と深鉢片が出土したが、住居跡等の遺構は発見されていない⁴。

弥生時代の遺跡のうち、前期の遺跡は加古川東岸の高田町の高田古苗代遺跡、高田地蔵ノ本遺跡、加古川西岸の河合中町の河合中カケ田遺跡があり、溝や土坑群が検出されている。中期にはいと遺跡の数が増加する。主な遺跡には加古川東岸の垂井遺跡、敷地王子町の王子城ノ下遺跡⁵、高田町の古苗代遺跡、地蔵ノ本遺跡、高田宮ノ後遺跡などがある。垂井遺跡では3棟の堅穴住居、高田宮ノ後遺跡では、堅穴住居10数棟が発見されている。加古川西岸では粟生町の三ツ塚遺跡、新部町の大寺遺跡、河合中町の河合カケ田遺跡、昭和町の金鐘城遺跡が知られる。金鐘城遺跡からは6棟の住居跡、河合カケ田遺跡ではⅡ期の円形周溝竪7基や後期の円形住居跡が発見されている⁶。

古墳時代の遺跡としては高田宮ノ後遺跡、敷地北西遺跡、敷地西遺跡、王子城ノ下遺跡があげられる。このうち、王子城ノ下遺跡では弥生時代後期から古墳時代にかけての住居跡16棟が発見され、高田宮ノ後遺跡では8棟、敷地北西遺跡では7棟の堅穴住居跡が発見されている。前期古墳の可能性が高い古墳として加古川西岸の粟生三ツ塚古墳があげられるが、実態が明らかではない⁷。中期の古墳群には王塚古墳をはじめとする王子古墳群が存在する。王子古墳群は24基からなるが、現在は王塚古墳と王子2号墳を残すのみである。なお、王塚古墳は昭和27年に発掘調査が行われ、主体部の堅穴石室から甲冑・鏡などが出土している。この他、王塚古墳群の北約500mには中期の敷地古墳群が存在していたが、現在は敷地大塚1基が残存するのみである。敷地大塚の主体部からは鏡7面が出土している⁸。後期の古墳群としては、焼山古墳群、船木・中香古墳群、櫻山古墳群など100基を超える古墳群がある⁹。また、加古川西岸の黍田町に11基からなる勝手野古墳群が所在し、裝飾付須恵器が2個体出土している¹⁰。

歴史時代にはいとと加古川の西岸に河合廃寺、やや遅れて大寺廃寺が建立され、東岸には広渡廃寺が建立される。河合廃寺は法隆寺式の伽藍配置と推定され¹¹、建立年代は7世紀第3四半期とされている。広渡廃寺は昭和48年から50年にかけて発掘調査が行なわれ、伽藍配置は薬師寺式で、創建年代は7世紀後葉であることが判明している¹²。集落遺跡としては、高田町の高田小山ノ下遺跡があり、小河川や溝から奈良時代から平安時代前中期の遺物が出土し、この中には墨書土器や緑釉陶器が含まれている。このほか、天神町では奈良時代前期の音谷窯跡が発見されている¹³。

久安元年（1145）年に東大寺領大部荘が立荘され、重源によって浄土寺が建立される。大部立荘以後の平安時代末から鎌倉時代にかけての主な遺跡は浄土寺遺跡や浄谷遺跡がある¹⁴。浄土寺遺跡では礎石建物や掘立柱建物の遺構群や平安時代末から近世にかけての遺物が出土しており、出土瓦は神出産であることが判明している。また、南山遺跡では平安時代末から鎌倉時代と推測される窯跡が発見されている。須恵質・土師質の椀や瓦・羽釜・土鍋を焼成している。このほか、この他、王塚古墳と敷地大塚古墳群の墳丘から平安時代の経塚が発見されている。



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|------------|-------------|
| 小野市 | 13 王塚古墳 | 26 垂井遺跡 | 40 東住沖ノ西遺跡 | 53 下住遺跡 |
| 1 下大段岡ノ山遺跡 | 14 敷地七反田遺跡 | 27 住吉神社遺跡 | 41 東住城跡 | 54 下住構屋 |
| 2 久茂沢ノ前遺跡 | 15 敷地西遺跡 | 28 市場古墳群 | 42 東住池ノ内遺跡 | 55 下住古墳群 |
| 3 葉多城跡 | 16 敷地大井遺跡 | 29 下可越遺跡 | 43 陣塚古墳 | 56 東住高山古墳 |
| 4 葉多兜神元遺跡 | 17 敷地東遺跡 | 30 田井遺跡 | 44 石橋遺跡 | 57 東住横石塚古墳 |
| 5 葉多門田遺跡 | 18 敷地大塚古墳 | 32 葉生城伝承地 | 45 下住上代遺跡 | 加古川市 |
| 6 葉多小山ノ下遺跡 | 19 敷地陣屋跡 | 33 西脇西遺跡 | 46 常楽寺跡伝承地 | 58 毛無山3号墳 |
| 7 王子江ノ内遺跡 | 20 敷地北西遺跡 | 34 西脇北遺跡 | 47 東住南遺跡 | 59 池内西古墳 |
| 8 王子城ノ下遺跡 | 21 敷地北東遺跡 | 35 阿形古墳群 | 48 下住東高在遺跡 | 60 カメ焼谷古墳群 |
| 9 王子山ノ下遺跡 | 22 広慶高寺 | 36 阿形城跡 | 49 下住高田遺跡 | 61 神子谷古墳群 |
| 10 王子山ノ下北遺跡 | 23 黒川岡ノ上遺跡 | 37 東住北代遺跡 | 50 下住北2号墳 | 62 大谷山1・2号墳 |
| 11 王子山ノ下遺跡 | 24 小野湯陣屋跡 | 38 東住長ヲサ遺跡 | 51 下住北1号墳 | 63 白沢高野群 |
| 12 王子2号墳 | 25 大島大坪遺跡 | 39 沖代遺跡 | 52 常光寺跡 | 64 池田虎2号墳 |

第3図 周辺の遺跡 (1/25,000)

下大部岡ノ山遺跡周辺の中世遺跡には、高田宮ノ後遺跡・高田山ノ下遺跡・高田久保田遺跡・高田村前遺跡・高田古苗代遺跡・高田地蔵ノ本遺跡・敷地キタコガ遺跡・敷地カノノ下遺跡・敷地北東遺跡・敷地北西遺跡・敷地東遺・敷地西遺跡などがあり、掘立柱建物や土坑・溝などが発見されている。敷地西遺跡で検出された掘立柱建物は、東西3間×南北約4間の四角柱建物で、東西約5.5m×南北約6.5mの規模を有する。

中世後半にはいと、平地や山地に城が築かれている。主な城跡には東条川沿いの豊地城、小田城⁷⁾、加古川西岸の金鐘城⁸⁾、河合城、下大部周辺では、輪坂城、業多城が築かれている。両城とも後世に改変を受けており、その縄張り等は明確ではない。

引用・参考文献

1. 青木哲哉「勝手野遺跡の地形環境」[勝手野古墳群] 2002年 兵庫県教育委員会
2. 上月昭信「志方町およびその周辺と加西市における遺跡の立地と遺物散布状況」[旧石器考古学] 21 1980年 旧石器文化談話会
3. 久保弘幸・國本綾子・竹中英典「東播磨地域における旧石器新資料」[旧石器考古学] 52 1996年 旧石器文化談話会
4. 吉識雅仁他「高田小山ノ下遺跡発掘調査報告書」1995年 兵庫県教育委員会
5. 「王子城ノ下遺跡」(現地説明会資料) 1996年 小野市教育委員会
6. 「シンボジウム高地性集落の謎にせまる」1995年 小野市教育委員会
7. 山本三郎「小野市栗生三ツ塚古墳群出土の銅鏃」[兵庫考古] 第5号 1979年
8. 田岡香逸「王塚古墳」[兵庫県史料集影I] 1955年
9. 鎌谷木三次「播磨出土漢式鏡の研究」1975年
10. 藤岡弘・橋爪康至「小野市中番地区群集墳調査概報」1996年 小野市教育委員会
11. 井守徳男・久保弘幸・松岡千寿「勝手野古墳群」2002年 兵庫県教育委員会
12. 田岡香逸・高井梯三郎・藤澤一夫「播磨国河合廃寺」[史迹と美術] 287 1958年
13. 鎌谷木三次「播磨上代寺院址の研究」1942年、高井梯三郎・堀江良弘「播磨大寺遺跡I 昭和四十六年度発掘調査報告」1972年 小野市教育委員会
14. 「播磨広波寺廃寺跡発掘調査報告」1980年 小野市教育委員会・播磨広波寺廃寺跡発掘調査団
15. 「兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 平成7年度年報」1996年 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
16. 山上雅弘他「浄谷遺跡」1993年 兵庫県教育委員会
17. 吉識雅仁他「小田城跡発掘調査報告書」1995年 兵庫県教育委員会
18. 「金鐘城跡遺跡」(現地説明会資料) 1993年・1994年 小野市教育委員会

参考文献

- 「小野市史」第4巻 1997年
「播磨国大部北現況調査報告書」I～VII 小野市教育委員会

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

下大部岡ノ山遺跡は、小野市田園町859に所在する。前章で述べたとおり、調査地周辺には平安時代後期～鎌倉時代に、東大寺大部荘が置かれていたが、これまでに埋蔵文化財の本発掘調査が実施されたことがなく、資料に乏しい地域でもあった。

兵庫県教育委員会では、平成11年度より、兵庫県十整備部まちづくり局住宅整備課が計画する県営久下山住宅の建替に先立ち、埋蔵文化財の調査を実施した。調査は、建設計画（第1期～第3期）に沿い、平成11年度～平成14年度にわたって実施した。平成11年度および14年度の確認調査では、遺構は検出されず、開発の際にすでに削平を受けたものと判断された。第2期工事の範囲を対象とする平成12年度の確認調査では、柱穴・溝等の遺構が検出されたため、当該期工事範囲について平成13年度に本発掘調査を実施した。

平成11年度～平成14年度に実施された調査は、下記のとおりである。

実施年度	調査番号	調査の種別	調査面積	調査期間	遺構	調査担当者
平成11年度	990253	確認調査	32㎡	平成11年11月26日	無	山本 誠
平成12年度	2000267	確認調査	57㎡	平成13年2月19日	有	山本 誠
平成13年度	2001007	本発掘調査	621㎡	平成13年5月10日～6月7日	有	森内秀造 久保弘幸
平成14年度	2002147	確認調査	46㎡	平成14年10月7日	無	高瀬一嘉

第1表 調査一覧

第2節 調査の概要

本発掘調査は、平成13（2001）年5月10日～同年6月7日に実施した。調査の体制は、下のとおりである。

【本発掘調査の体制】

- 1 発掘調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 2 調査担当者 調査第2班 調査専門員 小川 良太
主 査 森内 秀造
主 査 久保 弘幸
現場事務員 五百蔵道代

着手前、調査地には木造平屋建ての住宅があり、その基礎等のために、すでに破壊された部分も見られた。このため調査に当たっては、表土層と攪乱部を重機掘削により除去したのち、以下の層を人力により掘削・調査して遺構・遺物の検出につとめた。遺構は、いわゆる「地山」である黄褐色シルト層の上面で検出されたが、遺物包含層はきわめて遺存状況が劣悪であり、検出面そのものも、相当程度削平が進んでいるものと判断された。



第4図 調査区位置図

また遺構面の調査中、調査区北半において後期旧石器時代に属すると思われる石核・剥片が出土したため、段丘礫層を被覆する黄褐色シルト層の掘り下げをおこなったが、石器包含層を確認することはできなかった。

検出された遺構は、国土座標系（V系）に沿って1/20の平面および断面図を作成したほか、写真による記録を実施した。また、富士測量（株）に委託し、ヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

第3節 整理事業の概要

出土遺物の整理、および報告書作成事業は、平成16年4月1日～平成17年3月31日にわたり、埋蔵文化財調査事務所において実施した。

遺物の接合・補強、復元、実測、および遺構図の補正、図のトレース、レイアウトは、調査担当者の指示のもとに、嘱託員がこれをおこなった。また遺物写真の撮影は、(株)タニグチ・フォトに委託した。

整理事業の体制は、下記のとおりである。

【整理事業の体制】

1 整理保存班	主任調査専門員	池田正男
	主査	長濱誠司
2 整理担当職員	主査	森内秀造
	主査	久保弘幸
3 整理担当嘱託員	主任技術員	眞子ふさ恵
	企画技術員	鳥村順子
		岸野奈津子
	図化技術員	木村淑子
		前田千栄子
	小野潤子	
	宮野正子	
	三好綾子	
奥野政子		
早川有紀		

第3章 遺構と遺物

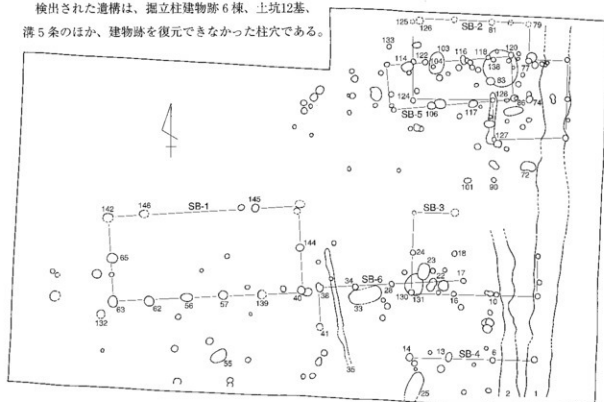
第1節 遺構

(1) 概要

平成13年度の調査では、調査区の南部・東部に集中して、掘立柱建物跡、土坑、溝等の遺構群が検出された。既述のように、調査区内では旧地形の削平が著しく、本来表土下に存在したであろう古土壌層（遺物包含層）はほとんど遺存していなかった。さらに、遺構検出面となった段丘礫層を被覆する黄褐色シルト層（地山）も、相当程度削平を受けているものと見られる。

検出された遺構は、掘立柱建物跡6棟、土坑12基、

溝5条のほか、建物跡を復元できなかつた柱穴である。



第5図 遺構分布図 (1/200)

0 10m

33.30m



1m

0

5m

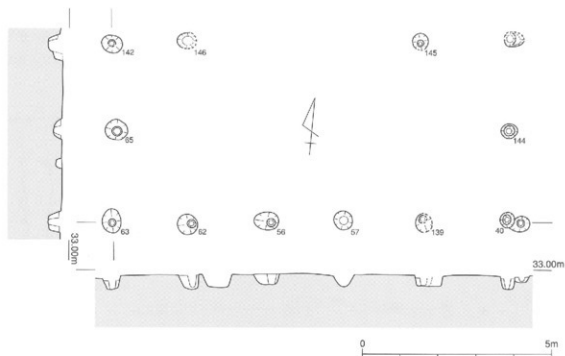
1. 表土・盛土
2. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細砂～細砂
4. 10YR3/3 暗褐色 極細砂

第6図 調査区地層断面図

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 1

掘立柱建物跡 1 は、調査区西部に位置する榦柱式 2 間×4 間の東西棟である。建物の長軸は、わずかに北東-南西方向の傾きを見せており、南辺の柱列で図上計測した方位は、E3.7°N である。柱間は東西（桁行）1.90m~2.30m、南北（梁行）2.30m~2.40m を測る。後節に、柱穴 S56・65・145 の出土遺物を記載する。



第 7 図 掘立柱建物跡 1

掘立柱建物跡 2

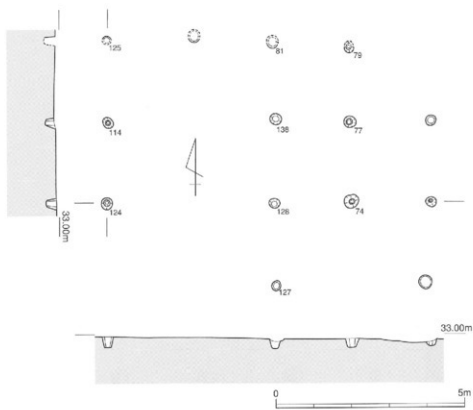
掘立柱建物跡 2 は、調査区北東部に位置する榦柱式の建物跡である。東西の広がり 4 間と考えるとよさそうであるが、遺構の北辺が調査区境界に接しており、これより北側に広がりをもつか否かは判断できない。仮に 3 間×4 間の東西棟と考えた場合、建物の長軸は、ごくわずかに北東-南西方向の傾きを見せるようであるが、南辺の柱列で図上計測した方位は、ほぼ正東西方向を示す。柱間は東西（桁行）2.00m~2.20m、南北（梁行）1.90m~2.25m を測る。後節に、柱穴 S74・77・79 の出土遺物を記載する。

掘立柱建物跡 3

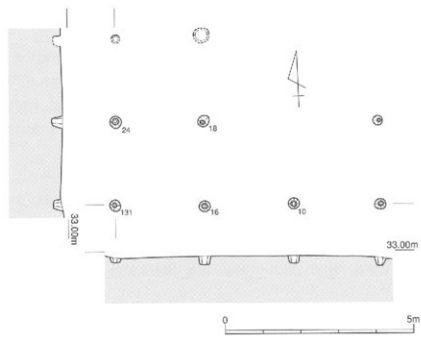
掘立柱建物跡 3 は、調査区東部に位置する榦柱式の建物跡である。検出された柱穴から、2 間×3 間まで復元が可能であるが、これ以上の広がりについては判断し難い。仮に 2 間×3 間の東西棟と考えた場合、建物の長軸はわずかに南西に傾き、E2.0°S を測る。柱間は東西（桁行）2.25m~2.30m、南北（梁行）2.15m~2.20m を測る。遺物には、図示できるものがなかった。

掘立柱建物跡 4

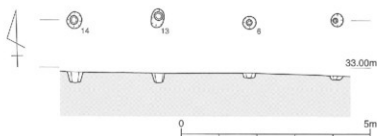
掘立柱建物跡 4 は、調査区南東部で、等間隔に並ぶ 3 間分の柱穴列として確認されたにすぎない。建物跡の大部分は、調査区南側に広がると思われる。柱穴列の軸線は、ごくわずかに北東-南西方向の傾きを見せて、図上計測した方位は、E15°S である。柱間は東西 2.20m~2.35m を測る。遺物には、図示できるものがなかった。



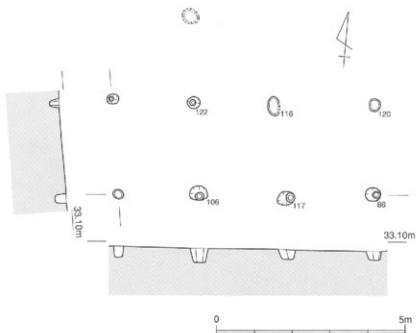
第8図 掘立柱建物跡2



第9図 掘立柱建物跡3



第10図 掘立柱建物跡 4



第11図 掘立柱建物跡 5

掘立柱建物跡 5

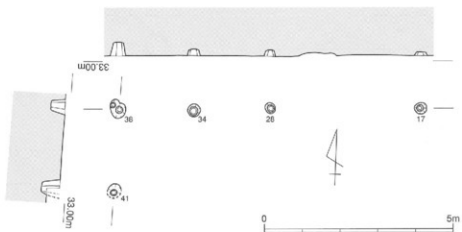
掘立柱建物跡 5 は、調査区北東部に位置する建物跡である。東西の広がり は 3 間と 考 え て よ さ そ う で あ る が、遺構の北辺が調査区境界に接しており、1 間 × 3 間の範囲が図上復元された。建物の長軸は北東 - 南西方向の傾きを見せ、南辺の柱列で図上計測した方位は、E 5.0°N である。柱間は東西（桁行）2.10m ~ 2.60m、南北（梁行）2.20m ~ 2.45m と、ややばらつきが大きい。柱穴 S 120 の出土土器を記載する。

掘立柱建物跡 6

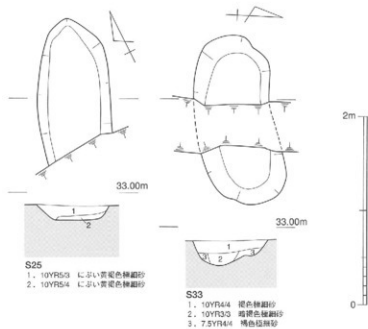
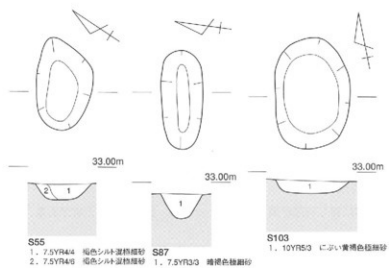
掘立柱建物跡 6 は、調査区南東部に位置する建物跡である。一部の柱穴を欠くが、東西の広がり は 4 間と 考 え て よ さ そ う で あ る。建物の南側の柱穴が検出されておらず、真に掘立柱建物跡としてよいかどうか、若干の問題を残す。長軸は北東 - 南西方向の傾きを見せ、南辺の柱列で図上計測した方位は、E 2.3°N である。柱間は東西（桁行）1.95m ~ 2.00m、南北（梁行）2.10m を測る。後節に柱穴 S 17 の出土遺物を記載する。

(3) 土坑

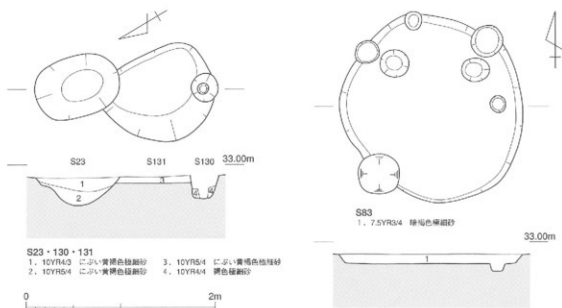
土坑は、合計 11 基が検出されたが、出土遺物は僅少で図示できるものはない。ここでは 9 基を図示する。



第12図 掘立柱建物跡 6



第13図 土坑 (1)



第14図 土坑(2)

S55は、調査区南部に位置する。やや歪んだ楕円形を呈し、長径115cm、短径60cm、深さ16cmを測る。

S87は、調査区北東部に位置しており、掘立柱建物跡2と重複する、長楕円形の土坑である。長径118cm、短径44cm、深さ26cmを測る。

S103は、調査区北東部に位置しており、掘立柱建物跡2と重複する、楕円形の土坑である。長径117cm、短径80cm、深さ12cmを測る。

S25は、調査区南端に接し一部が調査区外へとのびる、長楕円形の土坑である。長径156cm、短径78cm、深さ16cmを測る。

S33は、調査区南部のやや東よりに位置する楕円形の土坑であるが、中央部を掘乱により破壊されている。長径182cm、短径80cm、深さ26cmを測る。

S23とS131は、S33の東に位置する。S131を切ってS23が掘り込まれている。規模は、S23が長径90cm、短径64cm、深さ30cm、S131が長径120cm以上、短径97cm、深さ8cmを測る。

S83は、調査区北東隅に位置し、掘立柱建物跡2と重複し建物跡の柱穴によって切られている。歪んだ円形の土坑で、直径198cm、深さ10cmを測る。

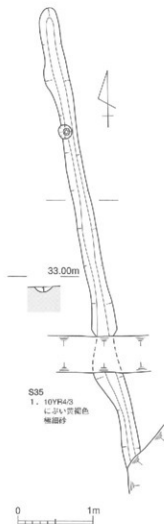
(4) 溝

溝は、5条が検出された。

S1・2は調査区東部に位置し、概ね平行して南北方向に延びる。2は調査区中央付近で擾乱のために破壊されており、これ以北では検出できなかった。S1は、断面観察から2条の溝が重複したものであることが確認されたため、古期の溝をS1a、礫を充填した新期の溝をS1bと呼称する。溝はいずれも掘立柱建物跡2・3の柱穴を切っていることから、両者の間に時期差が存在することは明らかである。S1bに充填された礫は、河川礫（亜円～亜角）であるが、これらの間に挟まるようなかたちで、中世後半期の陶器・瓦等が出土している。

S1・2は、その方向性から何らかの地割りに関わる溝と思われる。

S35は、調査区南部に位置し、南北方向からやや西に傾斜した延長方位を見せている。深さ6cm前後を測る。



第15図 溝 (S35)

第2節 遺物

(1) 遺構出土の遺物

掘立柱建物跡1 (1～3)

柱穴掘形から須恵器の杯Aが出土している。1がS65、2がS56、3がS145からの出土で、いずれも細片で口縁部を欠く。底径は1が9.2cm、2が9.3cm、3が10.4cmで、底部外面はヘラ切り後ナデ調整が施されている。胎土はいずれも精良で、灰白色を呈している。3は内面にヘラ記号が刻まれている。また、1と3は底部外面に火摩痕が残る。底部の残存率は1が1/8、2が1/6、3が1/4である。

掘立柱建物跡2 (4～8)

柱穴掘形から土師器杯・皿が出土している。4はS74から、5・6はS77から、7・8はS79からの出土である。4・5は土師器の小皿で、4が口径6.0cm、器高1.3cmで、5が口径7.8cm、器高1.2cmである。いずれも底部内面はナデ調整を行うが、外面は指押さえのみで調整は行わない。7・8も小皿であるが、4・5の体部が丸みを帯びるのに対して、7・8は体部が直線的に斜め上方に立ち上がり、体部外半を強くなる。底部が欠損しているが、ロクロ成形されており、底部の切り離しは糸切り、若しくはヘラ切りになるものと思われる。6は口径11.2cm、器高2.5cmの杯で、形態は4・5と同じである。

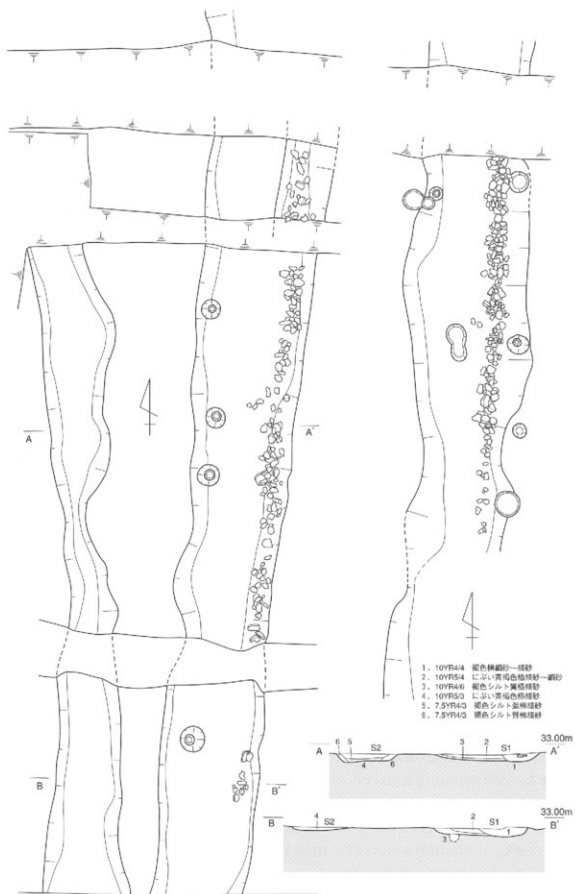
体部に粘土紐の織き目の跡が残る。口径の残存率は4が1/3、5が1/4、6が1/6、7が1/6、8が1/3である。7は口径9.1cm、器高2.1cmで、8は口径9.8cm、器高2.1cmである。

掘立柱建物跡5 (9)

S120から土師器の小皿9が出土している。口径8.0cm、器高1.6cmである。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。ロクロで成形されているが、底部の切り離しは摩滅が著しくヘラ切りか糸切りかは不明である。残存率は口径で1/4、底部で1/2である。

掘立柱建物跡6 出土遺物 (10)

S17から須恵器の杯Bの底部片10が出土している。幅の狭い高台が付く。胎土は精良で、灰白色を呈



第16図 溝 (S1・2)

している。底径12.6cm。

土坑・柱穴群出土遺物（11～17）

11はS104からの出土で、平高台をもつ須恵器椀である。底部外面にはヘラによる切り離し痕を残す。高台の高さは0.6cmで、体部側面はヘラで整えられている。焼成は悪く、瓦質に近い仕上がりである。

12はS22出土の須恵器杯Bの底部片である。底径8.6cmで、短く外側に踏ん張る高台をもつ。伏せた状態で焼成されており、底部外面から体部外面全体に降灰があり、オリブ灰色に発色している。ていねいな調整を施し、胎土も精良である。底部の残存率は1/8程度である。

13はS101出土の残存率1/8程度の須恵器杯Aの底部破片である。底径10.8cmで、底部外面はヘラ切り後にナデ調整が施されている。底部の残存率は1/8である。

14はS132出土の須恵器破片。口縁部に欠く。底径8.6cm。ヘラ切り後ナデ調整を施す。胎土はいずれも精良で、灰白色を呈している。底部の残存率1/4である。

15はS133出土の須恵器杯の口縁部破片である。口径15.4cm。口縁部端部外面に重ね焼の痕跡を残す。胎土に黒粒を含む。口縁部の残存率は1/8である。

16はS72出土の土師器杯である。口径12.2cm。体部内外面に指押さえ痕が残る。

17はS126出土の土師器鉢片である。口径22.4cm。片口を有するものと思われるが、片口部を欠く。また、底部を欠く。内外面ともナデ調整を施す。口縁部の残存率は1/6である。

溝S1出土遺物（18～26）

18は残存率1/4程度の須恵器椀破片。口縁部を欠く。底部の切り離しは回転糸切りである。底径5.5cm。

19は須恵器片口鉢。口縁部を丸く納める。小片のため口径は復元できない。

20は須恵器杯。口径17.1cm、器高3.8cm、底径10.0cm。体部の器壁は薄手で、直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚する。底部の切り離しは回転糸切りである。

21は須恵器壺底部の破片である。底径14.6cm。体部は外面回転ヘラ削り、底部外面もヘラ削り調整を行なう。

22は残存率1/12程度の土師器鉢破片である。口径17.8cm。口縁部は直立し、端部は横方向に突出する。内外面には煤の付着は認められない。

23は土師器羽釜。復元径は25.8°であるが、小片のため、必ずしも正確な数値ではない。口縁部下に退化した鈿を貼り付ける。内外面には煤の付着は認められない。

24・25は、ともに甕体部の破片である。同一個体の可能性が高い。外面は欠羽状の叩き痕、内面には青海波のあて具痕が残る。

26は備前焼のすり鉢である。径3.4cmで16本単位のオロシ目がある。

溝S2・包含層出土遺物（27～29）

27は須恵器片口鉢。口縁部は外側に丸く膨らむ。

これらのほかに、調査区東部において、遺構面の検出中に出土した遺物がある。状況から溝1に包含されていた遺物の可能性が高いため、あわせて記載をおこなう。

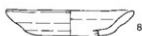
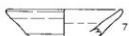
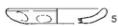
28は須恵器杯。底部糸切り。体部ない外面は成形時の凹凸が激しく、器面をナデまたはヘラ状工具で調整している。口縁部は肥厚する。口径14.2cm、器高2.8cm。

29は須恵質の土鍾。長さ8.5cm、中心部径3.9cm～4.3cm、両端径が2.9cm、孔径1.7cmである。粘土板を棒状の芯に巻きつけて成形している。粘土板の両端の合わせ目は指で撫で消されているが、一部合わせ目が出ている。

掘立柱物跡 1



掘立柱物跡 2



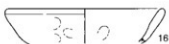
掘立柱物跡 5



掘立柱物跡 6

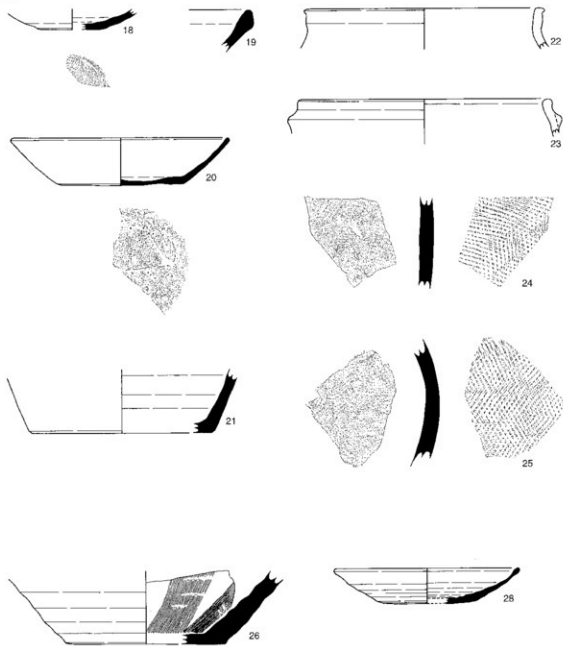


土坑・柱穴群

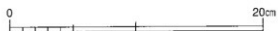
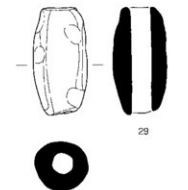


第17図 出土遺物 (1) 土器

溝S1



溝S2



第18図 出土遺物(2) 土器・土製品

その他の遺物

遺構の検出作業中、いわゆる「地山」にあたる黄褐色シルト層に密着、ないしは食い込んだ状態で、数点の石器が出土した。出土状態から、旧石器時代の遺物である可能性が高いと判断されたが、その後の下層の調査では、石器の包含層位を明らかにすることはできなかった。

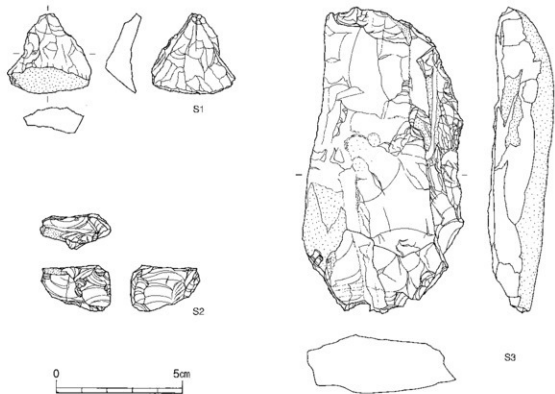
S1は、石英の剥片である。底面に礫表皮をとどめており、その状況から水磨された礫を素材としたものと判断できる。両側縁は、打点を中心に折損している。剥離面を打面としているが、非常に狭いため、調整の有無は明らかではない。背面・腹面ともに同一打面から剥離されており、剥離面、特に腹面末端付近には、石英の特徴である複雑な裂痕をみせる。S94（柱穴）より出土した。

S2・3は、チャート製石核である。

S2は、灰色の良質なチャートを用いた、剥離の進んだ残核である。剥離面を打面としつつ、打面転移を繰り返して剥離がおこなわれている。

S3は、水磨されたチャートの分割礫を用いている。礫表面を打面、分割面を剥離作業面として、石核縁辺に沿うように、打点を順次移動させつつ剥離をおこなっている。風化した層を挟み、2に比べやや粗質な印象を受ける。

これらの石核・剥片は、いずれも本来の包含層から遊離したものであり、その所属年代を確定することは困難である。しかし、2・3の石核が、同じ小野市内の勝手野遺跡で検出された、A T下位の石器群に通底する剥離工程を見せている点は、注意すべき特徴と言えよう。調査地内で縄文時代の遺物を見ないこと、本地域内で、弥生時代にこれらの石材が用いられることが極めて稀であることと考え合わせれば、これらの石核・剥片は、後期旧石器時代に属する可能性が高い。



第19回 出土遺物（3）石器

第4章 総括

今回の調査で出土した遺物の時期は大きく(1)8世紀代～9世紀代、(2)12世紀代～13世紀代、(3)15世紀代～16世紀代の3時期に分けることができる。

8世紀代～9世紀代の遺物にはSB01掘形出土遺物(1～3)、SB06出土遺物(10)、S22(12)、S101(13)、S132(14)、S104(11)があり、いずれも須恵器である。これらの産地は火燗痕や胎土・色調から加古川市志方町から加西市にかけての市境に広がる志方窯跡群産の可能性が高い。

12世紀代～13世紀代の遺物としては、SB05(9)、S133(15)、溝S1出土遺物(18～20・24・25)、28・29がある。このうち、20・29は底部糸切りの杯である。この種の杯は、三木市和田村遺跡をはじめ三木市から神戸市北区淡河町にかけての遺跡で出土している。12世紀中頃に比定されている三木市久留美柳谷7号室では碗形態から器高が低く底径の広い杯形態への転換が見られる。当該資料はこれより後出のものであるが、生産地は不明であり、また年代も確定していない。一応13世紀代のもthingとしておきたい。24・25は矢羽叩き痕を残すもので、三木市跡部3号窯出土物の叩き痕に類似する。

15世紀～16世紀代の遺物としては、溝S1出土の22・23・26、溝2出土の27がある。22・23はこれまでに示されている福年案に従えば、15世紀中頃から16世紀前半代となる。

このような遺物の年代観に従って、遺構の時期について整理するならば、概ね下記のようにまとめることができる。

- ① 奈良時代～平安時代前期 調査区中央部に位置する掘立柱建物跡1、およびこれに近い方位を見せる掘立柱建物跡6がこれに相当する。
- ② 平安時代末～鎌倉時代 調査区東部の掘立柱建物跡2および5がこれに相当するが、この両者には重複関係が見られるため、同時期内で若干の時間差が考慮される。掘立柱建物跡2と重複せず、企画的な配置を見せる掘立柱建物跡3・4も、同一時期に属する可能性が高い。
- ③ 室町時代後期 調査区東部の溝がこれに相当する。②期に属する掘立柱建物跡の柱穴を切っけられていることから、建物群廃絶後に土地利用形態が変化して、新たな地割が設けられたものであろう。

今回の調査地は、東大寺領大部荘の荘域内に含まれる。こうした点からは、特に今回検出された②期の掘立柱建物跡群を中心とする遺構群は、大部荘と何らかの関連をもつものであった可能性がある。しかしこうした点について十分に論ずることは、現在のところ困難と言わざるを得ず、今後の周辺における調査の進展に期待される点は少なくない。

- (1) 森内秀造・仁尾一人・岡本一秀「志方窯跡群Ⅰ-中谷支群-」2000年 兵庫県教育委員会
森内秀造・仁尾一人・岡本一秀「志方窯跡群Ⅱ-投松支群-」2001年 兵庫県教育委員会
- (2) 池田征弘氏教示
- (3) 森内秀造・池田征弘他「久留美・跡部窯跡群」1999年
- (4) 中村浩・毛利哲夫「久留美毛谷」1990年 毛谷窯跡群埋蔵文化財調査会
- (5) 岡田幸一・菱田淳子・深江英憲「兵庫津遺跡Ⅱ」2004年 兵庫県教育委員会

報告書抄録
(Outline of the report)

よみがな	しもおべおかのやまいせきはつちようさほうこくしょ			About The Report	
書名	下大部岡ノ山遺跡発掘調査報告書			Excavation Report of the SHIMO-OHBE OKANOYAMA Site	
副書名	なし				
巻次	なし				
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告書			Report of the Archaeological Properties HYOGO Pref. Vol. 274	
シリーズ番号	第274冊				
編著者名	森内秀造・久保弘幸			The Author/Editor	
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所			SYUZO Moriuchi, HIROYUKI Kubo Hyogo Pref. Center of Archaeology	
所在地	神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号			Address: 2-1-5 Arata-cho, Hyogo ward, Kobe city, Hyogo Pref., Japan	
発行年月日	平成16(2004)年7月31日				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号		north latitude	east longitude
しもおべおかのやま 下大部岡ノ山	ひょうごけんおのしんえんちょう 兵庫県小野市田園町 859-1	28218	190580	34° 51' 39"	134° 55' 13"
遺跡調査番号	調査の種類	調査期間		調査原因	
2001007	本発掘調査	2001年5月10日～6月7日		県営小野久下山住宅建設事業	
遺跡の種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
集落遺跡	後期旧石器時代 奈良～平安時代 鎌倉時代	掘建柱建物跡・溝・土坑 (奈良～平安時代・鎌倉 時代)	石核・剥片(後期旧石器 時代) 土師器・須恵器 (奈良時代～鎌倉時代)		
Category and Period of the site					
Village	Late Palaeolithic age Nara-Heian age Kamakura age	Pits of structures: Nara-Heian age, Kamakura age Ditches: Nara-Heian age, Kamakura age Holes for waste: Nara-Heian age, Kamakura age			
Rerics	Stone cores: Palaeolithic age Haji ware, Sue ware: Nara-Heian age, Kamakura age				

写 真 图 版



調査地遠景（南から）



調査地遠景（北から）



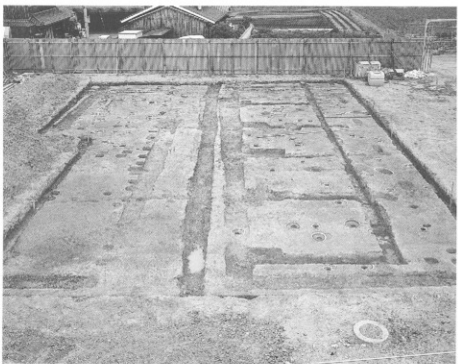
航空写真（南から）



航空写真（西から）



調査区全景（南から）



調査区全景（西から）



掘立柱建物跡 1 (南から)



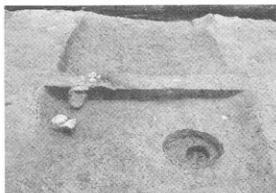
掘立柱建物跡 2 (南から)



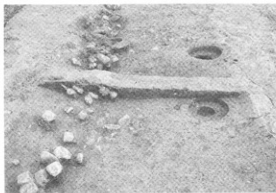
掘立柱建物跡 3 (西から)



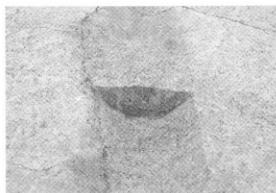
調査地から加古川対岸を望む



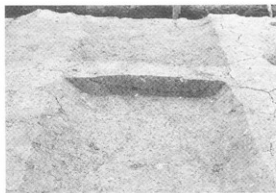
溝 S1 断面 (1) (北から)



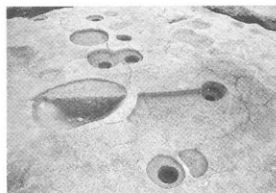
溝 S1 断面 (2) (北から)



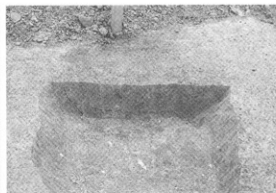
溝 S35 断面 (南から)



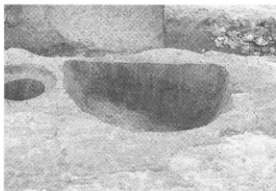
溝 S2 断面 (北から)



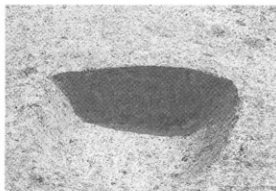
土坑 S23, 130, 131 断面 (南から)



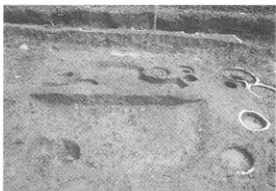
土坑 S25 断面 (北から)



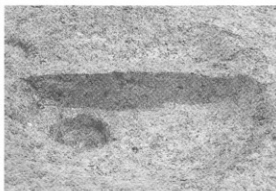
土坑 S33 断面 (西から)



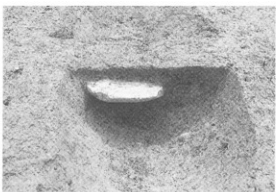
土坑 S55 断面 (西から)



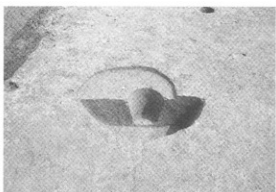
土坑 S83 断面 (南から)



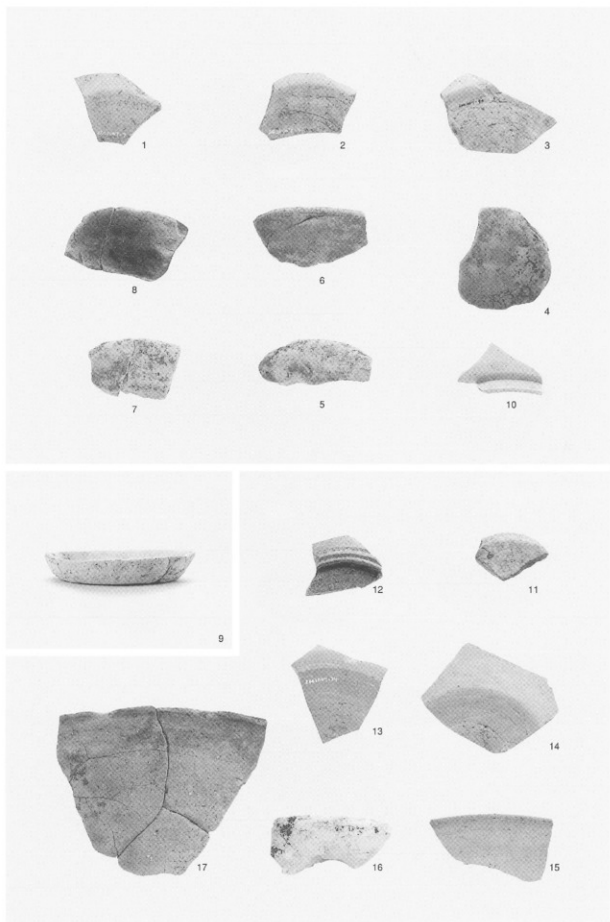
土坑 S103 断面 (東から)



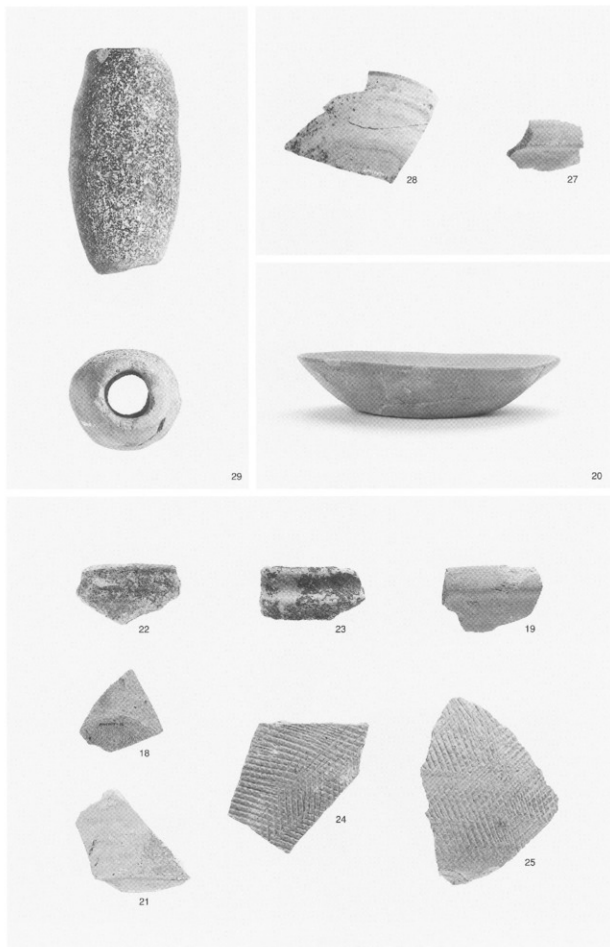
土坑 S87 断面 (西から)



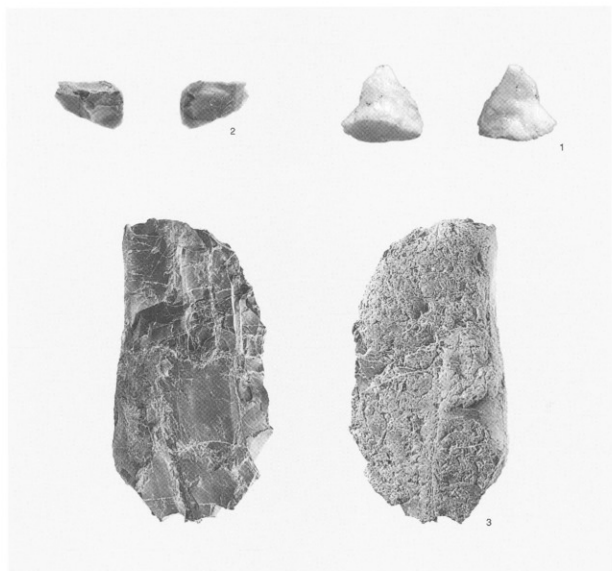
柱穴 S56 断面 (南から)



出土遺物 (1) 土器



出土遺物(2) 土器・土製品



出土遺物（3）石器

下大部岡ノ山遺跡発掘調査報告書

—県営小野久下山住宅（第2期）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005（平成17）年3月発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

T E L. 078(531)7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

T E L. 078(341)7711(代)

印 刷 株式会社 精文舎

〒652-0047 神戸市兵庫区下沢通6丁目2番18号

T E L. 078(575)4729(代)
